

16 被服工作の原理について 袖丸の一考察

安城学園女子短大 加藤くりゑ

袖丸は日本衣服の原形と言われている小袖と一身同体の関係にある。今日のきものの源であり平面的な直線機構の一角に画かれた只一つの円形である。着装後は立体化した直線と融合して動的な機能美を印象づけるものである。このように袖丸の曲線価値は大きく着装者の調和美を高める。ここに曲線に対する高度な技術構成が欲求される理由がある。日本衣服の構成骨子となるものは直線、直角、斜線、曲線の四種類で成立されている。いずれの部分も素材の余剰を合理的に処理することが工作の根本原理である。この原理の把握が日本衣服構成の特殊性であって、立体構成に相反する平面的な要素がここにひそんでいる。そのうち袖丸構成は素材の余剰が特に多量でこれを平面化するには周到な計算意識を必要とするのである。円形の原理を経とし緯の技術についてはその内部にひそむ客観性を追究して止まない態度で望んでみたのである。私はこれを解決に導く思考の方向を演繹と帰納の両面に求めて実験を試みた。今回はこの過程と結果について報告する。以上は伝統的な技術の主体性を分析して更に新しい要素を加え的確な工作法を完成したいためである。